
資 料

Beth L. Rodgersの概念分析について
－哲学的基盤に基づく目的と結果の再考－

濱田真由美

Beth L. Rodgers' Concept Analysis
: Re-examining research purpose,
results to follow her philosophical underpinnings

Mayumi Hamada

キーワード：概念分析、ロジャース

key words : Rodgers, evolutionary view, evolutionary method

要 旨

本稿は、日本の看護領域において利用される頻度が高いと推察されたRodgers (2000) とWalker & Avant (2005/2008) の概念分析のアプローチ方法を比較するなかで、Rodgersのアプローチ方法がもつ特徴について検討し、このアプローチを用いる根拠を明らかにすることを目的とした。

Walker & AvantとRodgersのアプローチを哲学的基盤に注目して比較・検討した結果、Rodgersのアプローチを選択する場合は、概念分析の目的やアプローチの選択理由が、概念はダイナミックに変化するものであり、境界が曖昧で、文脈依存のものであるという概念に関する哲学的基盤に一致しており、かつ概念の辞書的定義ではなく、文脈に基づいた真実、本質、普遍性を志向した個性記述的な一般化から概念を明らかにするというアプローチに関する哲学的基盤との間に一貫性があることが求められる。また、Rodgersのアプローチを採用する場合は、概念の社会文化的側面や学問間の比較、経時的变化を文脈を損なわないかたちで探究することによって、概念の理解を高め、看護学や看護実践への示唆を得ることが概念分析の目的として挙げられ、結果へと反映される必要性が見出された。

受付日：2015年11月9日 受理日：2016年5月19日

日本赤十字看護大学 Japanese Red Cross College of Nursing

I. はじめに

看護における概念分析の手法はWilson (1963, 1969) が提示した指針から発展した (上村・本田, 2006, p.98) と言われている。Wilsonを基盤とするアプローチには、Walker & Avant (1983, 1988, 1995) や Chinn & Jacobs/Kramer (1983, 1987, 1991, 1995, 1999, 2004)、Schwartz-Barcott & Kim (1986, 1993, 2000) のハイブリッド・モデル (上村・本田, 2006, p.98 ; Knafel & Deatrck, 2000, pp.44-45) があり、Wilsonの方法を拡大したHaase, Britt, Coward, Leidy, & Penn (1992) の Simultaneous Concept Analysis法 (Haase, Leidy, Coward, Britt, & Penn, 2000, pp.209-210 ; 中木・谷津・神谷, 2007, p.46) も当てはまるだろう。

このようにWilsonのアプローチは看護領域における概念分析の発展に大きな影響を与えていると言える。しかし、一方で大きな批判も受けており、その理由はWilsonのアプローチが直線的なものであり、実証的な性質 (過度に量的な性質) をもち、過度に単純化された手順をもっていることによる (Cutcliffe & McKenna, 2005/2008, pp.349-350)。そのため近年では、B. L. RodgersやMorseによる質を重視したアプローチが重要であると考えられている (Cutcliffe & McKenna, 2005/2008, p.350) という。

現在、わが国の看護界ではB. L. Rodgersのアプローチ方法 (以下、Rodgersのアプローチ方法) に基づき概念分析をおこなった論文が数多く掲載されている。医中誌Webを用いて“概念分析”をキーワードに検索すると185件の文献がヒットした (2014年9月9日現在)。このうち、抄録がなかったり目的が概念分析ではなかったりした論文を除くと78件となった。抄録に記載された概念分析のアプローチ方法別に分類すると52件がRodgersであり、次いで20件がWalker & Avantであった (表1)。このように、医中誌Webで検索した論文に限ってもRodgersのアプローチ方法は、日本の看護領域における概念分析の約7割を占めるほど一般的になっているといえるだろう。しかしながら、いくつかあるアプローチ方法のなかで、なぜRodgersを用いるのかといった根拠が示された論文は非常に少ない。

表1. 抄録からみた日本における概念分析の

アプローチ別論文数	(n=78)
アプローチ方法	n (%)
B.L.Rodgers	52 (66.7)
Walker & Avant	20 (25.6)
Shwartz-Barcott & Kimが提唱したハイブリッドモデル	4 (5.1)
Wilson	1 (1.3)
Simultaneous Concept Analysis法	1 (1.3)

概念分析の各アプローチ方法には、基礎となる哲学的基盤 (理論的パースペクティブ) がある。哲学的基盤は、結果の解釈や考察に影響するため、概念分析の目的に応じたアプローチ方法を選択することが、研究の論理一貫性を保つ重要な鍵となる (北・谷津, p.iv; JRC-NQR, 2012)。そのため、研究者は概念分析の目的に最もあったアプローチ方法を選択しなければならない (Grove, Burns, & Gray, 2013/2015, p.108 ; Rodgers, 2000, p.31)。そこで本稿では、医中誌Webの検索結果から日本の看護領域において利用される頻度が高いと推察されたRodgers (2000) とWalker & Avant (2005/2008) の概念分析のアプローチ方法を比較するなかで、Rodgersのアプローチ方法がもつ特徴について検討し、このアプローチを用いる根拠を明らかにすることとした。

II. 研究目的

本研究の目的は、Rodgersのアプローチがもつ特徴、すなわち哲学的基盤に基づく目的とそこから導かれる結果について検討し、Rodgersのアプローチを選択する根拠を示すことである。

III. 研究方法

A. 分析対象

Rodgers (2000)、Walker & Avant (2005/2008) の著書、概念分析についてまとめた書籍 (Cutcliffe & McKenna, 2005/2008)、概念分析について解説している論文 (Cronin, Ryan, & Coughlan, 2010 ; Duncan, Cloutier, & Bailey, 2007 ; Hupcey & Penrod, 2005 ; Risjord, 2009 ; 田代・氏原・富安他, 2002 ; 上村・本田, 2006 ; Weaver & Mitcham, 2008) や書籍 (Grove, Burns, & Gray, 2013/2015) を主要文献とした。

B. 分析方法

主要文献に基づき、アプローチ方法別に哲学的基盤、概念分析の目的、手法、結果や結論について抽出した。そしてアプローチ方法の類似点と相違点に注目しながら比較検討し、Rodgersのアプローチ方法がもつ特徴をまとめ考察した。

IV. Walker & AvantとRodgersの アプローチ方法に関する比較

A. 哲学的基盤と目的

看護研究・教育の質向上のために看護で使用される概念の開発や精選が必要であるという問題意識が高まった米国 (田代・氏原・富安他, 2002, p.54) において、1980年代に出版された概念分析のアプローチ方法は、科学的探究の目的が物事の本質を確認したり論証した

りすることだと指摘したアリストテレスにルーツをもつ (Rodgers, 2000, p.12)。同様に、Wilsonの古典的な概念分析の手順を修正し、簡潔にしたWalker & Avantの手法 (Walker & Avant, 2005/2008, p.92) も、現象の本質を探索していく本質主義 (essentialism) (田代・氏原・富安他, 2002, p.54) や実証主義のパラダイムを哲学的基盤としている (Weaver & Mitcham, 2008, p.188)。本質主義とは、物事には普遍的な特性が備わっており、世界の変化や動きに影響を受けない普遍的な真実が物の根拠や原理になっているという考えであり (Rodgers, 2000, p.12; 八木沢, 1998, p.1509)、実証主義とはそうした物事の真の姿は客観的に説明できるとする立場である (Denzin & Lincoln, 2000/2008, p.27)。

こうした指摘を裏付けるようにWalker & Avant (2005/2008) は、概念を「現象がその概念と適合し、またどの現象が適合しないかを決定できるような、その概念を定義づける属性あるいは特性を含んでいる」(p.89) ものだと主張している。したがってWalker & Avantによれば、概念分析とは「概念の活用や本質、そして属性を明確にするのに役立つ」(p.41) ものと捉えられている。こうしたパラダイムに立つWalker & Avantによる概念分析の目的は、「概念の基礎となる要素を調べる過程」(p.90) であり、「概念を定義している属性と適切でない属性とを区別すること」(Knafli & Deatricks, 2000, p.44; 田代・氏原・富安他, 2002, p.55; 上村・本田, 2006, p.98) に焦点が当てられている。このような目的によって分析された概念は、曖昧さが洗練されたり、概念の内部構造が明らかにされ、厳密な操作的定義や概念間の関係の仮説、測定用具やインタビューガイドを作成する際に有用なものとなる (Walker & Avant, pp.90-91)。

本質主義の見解に基づけば、概念は文脈上バリエーションがなく、変化のないもの、普遍的なものであるとされ、その結果、概念分析は探究した概念を正確に解き明かすものであると考えられてきた (Rodgers, 2000, p.77)。しかし、概念の解釈は時間の経過や社会経済、文化、学問的文脈によって変化する。S.ToulminやL.Wittgenstein、H.H.PriceやG.Ryleに影響を受けたRodgers (2000) は、概念はダイナミックに変化するものであり、境界が曖昧で、文脈依存のもの、固有の真実というよりはいくつかの実践的な有用性や目的をもつものという考え方を採用する (p.77)。この考えは、Toulminの「概念は、社会相互作用や“文化化 (enculturation)” と呼ばれるプロセスを通して発展する」(Rodgers, p.28) という考えや「様々なフィールドにおける知の前進と概念の関係に関する興味深い記述」(p.28) に影響を受けている。Rodgersは、概念の発展や変化に関連するプロセスや因子、社会的特質を指摘したToulminの考えから、概念分析にはこれら

の側面を考慮する必要性があること、また概念を区別する本質や堅く不動の境界という観念を再評価する必要性があることを述べ (p.29)、「概念の進化 (evolution of concepts)」(p.28) という視点を得ている。

Rodgersのアプローチに基づく哲学的基盤は、概念は時代や文脈によって変化し発展するという「進化的視点 (evolutionary view)」である (Knafli & Deatricks, 2000, p.47)。こうした視点は、現実にはホリスティックなものであり、主観的で絶えず変化するもの、特定の文脈内でのみ説明できるものであるという、解釈的あるいは構成主義的な認識論に合致する (Weaver & Mitcham, 2008, p.189)。そのため、Rodgers (2000) は、概念分析は、「概念が何であるのかに関する質問への定義的な答えを提供するものではない」(p.99) とし、概念分析の目的を概念が使用される文脈を省察し、最終的にはより有用な概念の開発へと向かうこと (p.80) と述べている。つまり、概念分析は終点ではなく (p.81)、更なる概念の探究と開発のための基礎となる発見的知識 (heuristic) を提供するもの (p.84) と捉えられている。

以上のことから、本質主義や実証主義を哲学的基盤とするWalker & Avantのアプローチ方法は、概念を定義するために必要な属性の抽出に目的が焦点化され、実践や研究における実用的な利用が想定されているといえよう。これに対し、解釈的あるいは構成主義的な認識論が内在する進化的視点を哲学的基盤とするRodgersのアプローチ方法では、概念が使用される文脈や概念の変化に注意を払い、概念を社会的・経時的に説明し、理解することを目的としているといえよう。

B. 手法

Walker & Avant (2005/2008) とRodgers (2000) のアプローチによる手法を表2にまとめた。いずれも8つの過程から成り立っており、概念を選択し、選択した概念の属性や特性、先行要件や帰結、モデル例を明らかにする点で類似している。しかし、データ収集の範囲という点で差異があるように見える。

Walker & Avantの手法では、概念を定義づける属性を決定するために、辞書、シソーラス、同僚、文献を使って概念のできるだけ多くの用法を発見し (Walker & Avant, 2005/2008, p.95)、できるだけ多くの異なる例を調べていくなかで概念を定義づけている特徴を見出していく (p.97)。これに対し、Rodgersのアプローチでは、概念分析における分析対象の選定が行われる。論文を分析対象とする場合には、対象として選択する文献のタイプや学問領域、調査した期間が設定され (Rodgers, 2000, p.87)、まず母集団が確定される。次に、母集団から分析対象とする文献、すなわちサンプルを選択する。

サンプルについてRodgers (2000) は、サンプルサイズは各学問領域や層から少なくとも30文献、あるい

表2. Walker & AvantとRodgersのアプローチによる手法の比較

Walker & Avant (2005/2008, p.93)	Rodgers (2000, pp.84-85)
1. 概念を選択する	1. 関心のある概念と関連する表現（代理の言葉を含む）を同定する
2. 分析のねらい、あるいは目的を決定する	2. データ収集のための適切な領域（設定やサンプル）を選択し、同定する
3. 選択した概念について発見したすべての用法を明らかにする	3. 同定に関連するデータを収集する
4. 選択した概念を定義つける属性を明らかにする	a. 概念の特性
5. モデル例を明らかにする	b. 学際的、社会文化的、経時的な変化 (variations) (先行要件と結果として起こる出来事；帰結) を含む概念の文脈上の原則 (basis)
6. 境界例、関連例、相反例、考案例、そして誤用例を明らかにする	4. 上記の概念の特性に関するデータ分析
7. 先行要件と結果を明らかにする	5. 適当な例があれば、概念のモデル例を同定する
8. 経験的指示対象を明らかにする	6. 関連、仮説、概念開発のための示唆を同定する

は母集団の20%を占める文献のどちらか大きい方をサンプルとして選別すべきであるが、概念に曖昧さや多様性が認められる場合にはより大きなサンプルが必要となるかもしれないと経験から述べている (pp.88-89)。またRodgersは、看護や医療の中でなじみのある概念を分析する際には、一般的な文献を含めることが重要であるかもしれないということを加えている (p.87)。その理由は、多くの人はメディアを通じて健康や医療に関する情報を得ており、そうした一般的な情報源は人びとが使用する概念の形成に寄与していることを挙げている (p.87)。このようにして収集したサンプルから、概念の学問領域間や経時的変化、現れた傾向の中で一致したり一致しなかったりする箇所をデータから探索するのである (p.85)。

例えば、Rodgers (1989) は健康政策 (Health policy) の概念分析をおこなった際、この概念が使用されている主要な学問領域、すなわち看護、医学、病院管理そして政策科学から発行された英文献を母集団として設定した (p.696)。含まれた英文献は、1972年から1985年までの雑誌記事、論説、文書、モノグラフ、書籍のレビューであった (p.696)。集められた英文献4566件 (母集団) を「記事 (articles)」と「書籍 (Book Reviews)」という層に分け、合わせて121件のサンプルを選択し (pp.697-698)、加えて専門家が健康政策において不可欠または画期的であると見なす文献4件と看護教育で用いられている全米看護連盟 (NLN) 編集によるテキスト10件を含め、合計135件の英文献をサンプルとして選択した (pp.696-697)。

こうしたサンプリングの収集についてRodgersは厳密性 (rigor) の確保を主張している (Rodgers, 1989, 2000; Rodgers & Cowles, 1993)。健康政策の概念分析をおこなった際には、比較的大きなサンプルサイズを用いることで概念に共通する用法を発見する尤度を高め、厳密性を確保するとともに、ピアレビューをおこなうことによって結果の正当性が支持されるよう努めている (Rodgers, 1989, p.697)。

また、Walker & Avant (2005/2008) は、「概念すべての定義属性を例示する」 (p.98) モデル例のほか

に、補足例として境界例や関連例、考案例、そして相反例を明らかにすることによって、概念の定義属性を徹底的に検証する (pp.100-101)。こうした補足例は、実世界の例でも、文献からの例でも、研究者が構築した例でもよいとされている (p.101)。さらに、Walker & Avantでは概念自体の発生を例示する経験的指示対象を決定することによって、概念が存在しているか否かを示す明確で観察可能な現象を臨床家に提供する (p.107)。これに対し、Rodgersは、概念に関する経験的なモデル例を示すのみである (Knafel & Deatrck, 2000, p.47)。Rodgers (2000) は、モデル例は調査者によって創られるというよりは文献のなかから同定されるべきであると指摘している (p.96)。モデル例の目的は、概念が現実生活のなかでどのようにあらわれているのかの実践例を示すものであるため (p.97)、研究者は分析対象としたサンプルに留まらず、追加の文献レビューをおこなったり、参加観察やインタビューをおこなったりすることで質の良いモデル例を探ることが求められる (p.96)。

Rodgers (2000) のアプローチでは、分析が進むにつれて、学問領域間や経時的変化、現れた傾向の中で一致したり一致しなかったりする箇所をデータから探索するというステップが行なわれ (p.85)、このステップはWalker & Avantでは行なわれない。概念の経時的な変化を同定することは、概念の起源、発展、機能への理解を促進するものであり (p.91)、概念の更なる開発につながる重要な情報を得ることができる (p.85)。こうしたステップを行うことによって、概念分析を概念の探究と開発のための基礎と位置づけるRodgers (2000) が強調する、更なる研究のための示唆を得る (p.98) という目的が達成される。しかし、概念は時代や文脈によって変化し発展するというRodgersの進化的視点は、概念分析の手法へ反映されていないという指摘がなされている (Hupcey, Morse, Lenz, et al., 1996, p.199; Wuest, 1994, p.580)。

以上のことから、哲学的基盤による概念分析の手法の違いは、Rodgers (2000) も認めるようにほとんどない (p.84)。しかし、Walker & Avantは臨床や研

究において有用な概念へと洗練させるための網羅的なデータ収集 (Risjord, 2009, p.686) と分析が行われるのに対し、Rodgersでは概念が用いられている主要な範囲のなかでデータを収集し、現実世界のなかで概念がどのように使われたり現れたりしているのかを時間や文脈を念頭に置いて検討することによって、実生活に根差した概念の分析を意図しているといえよう。しかし、Rodgersのアプローチは、文脈や時間に密着した概念の特性をどのように抽出し分析するのかといったところの具体的な方法については明確に示していない。

C. 結果・結論

20の概念の分析をまとめた書籍『看護の重要コンセプト20－看護分野における概念分析の試み』(Cutcliffe & McKenna, 2005/2008) のなかで、Walker & AvantとRodgersのアプローチを用いている分析の結果および結論を比較した (表3)。その結果、哲学的基盤による概念分析の手法に大きな差が見られなかったのと同様に、結果においても使用例や属性、モデル例、先行要件と帰結を明らかにするという点で類似していた。Rodgers (2000) も述べているように、概念分析の主要な成果は、概念の属性を同定することにある (p.91)。

しかし結論の記述では、Walker & AvantとRodgersを用いた研究者との間に違いが認められた。Walker & Avantのアプローチを用いて概念分析を行った研究者は、明らかになった属性や先行要件、概念の成熟度 (Cutcliffe & McKenna, 2005/2008, p.47; p.136)、実

践への応用 (Cutcliffe & McKenna, p.250) に焦点を当てていた。これに対し、Rodgersのアプローチを用いた研究者は、歴史的に強調されてきた側面と現在コンセンサスが得られている側面 (p.62) や様々な状況における概念の流動的性質、社会構成主義的な言語の使用、歴史的に変化していない側面 (p.296) が記載されていた。

Rodgers (2000) のアプローチ方法による概念分析の結果は、実践や研究においてすぐに利用できることが期待されるものではない (p.84)。代わりに、概念分析を行うことによって、概念の限界や強みを評価し、概念が学問に対して貢献している程度を査定したり、概念開発の次の段階へと移ることを可能にしたりする (p.84)。健康政策という概念を分析した結果、Rodgers (1989) は看護師と医師とでは健康政策という概念の使い方が異なることを同定し、こうした知見が学問間の理解を促し、他職種との協働のあり方を改善することに寄与する可能性を指摘している (p.97)。

概念分析において最も重要なことは存在する概念的問題 (例えば、概念の定義が明らかにされていなかったり、複雑であったりする場合) を解決することである (p.81) とRodgers (2000) が述べているように、アプローチとしてWalker & AvantやRodgersを用いても、概念の定義を明らかにするという点で分析結果の内容に大きな差はない。しかし、Walker & Avantのアプローチを用いた分析では、概念の定義や実用性が結論づけられるのに対し、Rodgersでは概念の歴史的変化や流動性への理解に焦点が当てられるといえよう。

表3. Walker & AvantとRodgersの概念分析から導かれた結果・結論の比較

アプローチ方法	Walker & Avant			Rodgers	
概念	ケアリング	恥	ファシリテーション	安楽	セラピューティックタッチ
結果	すべての使用例を明らかにする (辞書、用語集 (類語例の探索)、文献上の言語的使用、理論的定義)	使用例の同定 (辞書、用語集、文献、恥を感じた人へのインタビュー)	使用例を明らかにする (文献、辞書、看護師の利用 (グループ討論))	歴史的背景 使用法 (辞書、用語集、文献)	概念への関心 代替語 文献検索
	属性の決定	属性の決定	属性の決定	属性の決定	属性の決定
	モデル例の構築	モデル例の構築	モデル例の構築		
	補足例: 境界例、関連例、対比例の構成	補足例: 境界例、関連例、開発例、対比例、誤用例の構成	境界例、関連例、対比例の構成		
	先行要件と帰結を明らかにする	先行要件と帰結	先行要件と帰結を見極める	先行要件と帰結	実証指標、先行要件、帰結
			実証指標		関連する概念 典型例
結論	<ul style="list-style-type: none"> 明らかになった属性、先行要件 実証指標の構築が困難なことから概念を発達させる必要性 概念の発達進化的で継続的な過程 	<ul style="list-style-type: none"> 恥への反応が実践に及ぼす影響を検討する重要性 職場のいじめや同僚間の暴力を考えるうえで有用 	<ul style="list-style-type: none"> ファシリテーションの定義 	<ul style="list-style-type: none"> 概念が示すものの不一致 歴史的に強調された点 最近の概念のコンセンサスが得られている点 	<ul style="list-style-type: none"> 看護にとって本質的な基本技術 看護のすべての状況で使用可能 様々な状況における流動的資質、社会構成主義的な言語の使用法の示唆 ナイチンゲール時代からの普遍性

V. 考察

Rodgersのアプローチ方法は、概念を時間とともに変化しない静的なものにとらえ、概念の普遍的な本質を明確にしようとする本質主義的な概念分析への批判から生み出されている (Cutcliffe & McKenna, 2005/2008, p.10; Hupcey, Morse, Lenz, et al., 1996, p.199, Rodgers, 2000, p.77)。しかし、本研究結果でも示されたようにRodgersの手法は、本質主義とされるWilsonやWilsonの手法を修正したWalker & Avantの手法と似ている (Hupcey, Morse, Lenz, et al., 1996, p.196; Rodgers, 2000, p.84)。中でも、Duncan, Cloutier, & Bailey (2007) は、概念が文脈依存であり時間とともに進化すると考えているRodgersがWalker & Avantのアプローチと同様に、意味が変わらないことを暗に示すモデル例の構築を手法に取り入れていることを批判している (p.295)。こうした点についてWeaver & Mitcham (2008) は、進化的視点に立つ概念分析の方法は解釈的パラダイムに合致するにもかかわらず、それでもなお実証主義的認識論を伝えると指摘している (p.189)。

また、Rodgersが強調する概念の文脈依存性は、Rodgersが本質主義とみなすWilsonのアプローチに含まれており (Hupcey, Morse, Lenz, et al., 1996, p.197; Risjord, 2009, p.687; Duncan, Cloutier, & Bailey, 2007, p.296)、共通性から概念を分析する観点はWilsonやWalker & Avantと同じ考えである (Duncan, Cloutier, & Bailey, 2007, p.297) ことを指摘する研究者もいた。さらに、普遍的真理の探求や概念への固定的な見方、直線的な分析といったWalker & Avantのアプローチを本質主義として批判する理由は、Walker & Avantの主張と異なっており (Cronin, Ryan, & Coughlan, 2010, p.65, p.66; Risjord, 2009, p.86; Walker & Avant, 2005/2008, p.90, p.99, p.114)、Rodgersのアプローチを採用する根拠にはならないと考えられる。

このようなRodgersとWalker & Avantに認められる類似性は、概念分析の主となる目的と結果が、存在する概念の問題を解決すること (Rodgers, 2000, p.81) や「概念を定義づける属性を明らかにする」こと (Walker & Avant, 2005/2008, p.90) にあり、基本的には概念を定義するという同じ目的を共有するためであると推察される。これは、どのようなアプローチを採用しようとも概念分析の最終的な目的が概念開発にあり、概念の同定と解釈によって理論の基礎を提出し、看護の知の発展に貢献すること (Rodgers, 2000, p.100; Walker & Avant, 2005/2008, p.51) であるためだと考える。Hupcey & Penrod (2005) が言及するように、概念分析は学問に基づく知識を高める最初のステップであり、科学的文献のなかから

「ありそうな真実」を推定するために用いられている (p.206)。

しかしながら、本研究のなかでWalker & AvantとRodgersを比較した結果、Walker & Avantでは分析の目的が属性の抽出に焦点化され、実践や研究における実用的な利用に向かっているのに対し、Rodgersの手法では概念が関係する文脈や時間的な変化に注意が払われ、概念を社会的・経時的に理解することに焦点化されていたことが相違点として現れた。この違いは、『バーンズ&グローブ看護研究入門原著第7版－評価・統合・エビデンスの生成』(Grove, Burns, & Gray, 2013/2015) の中で示されている概念分析方法別にまとめられた独自のな特徴 (pp.108-109) と一致している。Walker & AvantとRodgersにみられた違いは、双方のアプローチが内包する「概念に関する哲学的基盤」と「概念にどのように接近するかというアプローチに関する哲学的基盤」の違いに基づいていると考えられる。すなわち概念に関する哲学的基盤とは、Walker & Avant (2005/2008) においては概念を「現象がその概念と適合し、またどの現象が適合しないかを決定できるような、その概念を定義づける属性あるいは特性を含んでいる」(p.89) ものと捉えるのに対し、Rodgers (2000) では概念をダイナミックに変化するもの、境界が曖昧で、文脈依存のもの (p.77) として捉えるという違いがある。また、概念にどのように接近するかについての基盤となる考えは、Walker & Avantではそのアプローチの起源となっているWilsonの概念分析の目的が「辞書的な定義のようなものを作ること」(Risjord, 2009, p.686) である一方、Rodgersは辞書的な定義ではなく、生きた世界における概念に類似した例と経験に適用でき得る (Cutcliffe & McKenna, 2005/2008, p.355) 「本当の (real)」定義に言及する (Cronin, Ryan, & Coughlan, 2010, p.67) という違いがみられた。

こうした哲学的基盤をもつRodgersのアプローチから導かれる結果について、Cutcliffe & McKenna (2005/2008) は、質的研究を引き合いに出し、文脈に基づいた真実、本質、普遍性を志向している個性記述的な一般化であると述べ、それは看護師、教育者、研究者にとって意味があり、有用性や価値を持っていると指摘している (pp.355-356)。したがって、Rodgersの哲学的基盤である進化的視点が手法として明確化されていない点は、Rodgersのアプローチを用いようとする研究者にとって重大な問題であろうが、質的研究と同様に特定の文脈に注意を払うことによって、文脈に基づいた個性記述的な一般化を導き出すことは可能であると考えられる。

概念分析を概念の定義のみならず、概念が使用される文脈や歴史的な変化に積極的に目を向けるRodgersのアプローチ方法は、Wuest (1994) が指摘するよう

に、概念の伝統的な定義や共通の使用法、類似語に対する思慮に富んだりフレクションを可能にし、概念に貼り付いたジェンダーや階級、性的志向、ヒエラルキーを明らかにする可能性がある (p.583)。しかし、Rodgersの進化的視点の要である、概念の意味が使用される文脈に依存するならば、使用する文脈が変わるとき概念の意味も変わらなければならないという考えは、概念や理論が時とともに変化することを強調する一方で、別の問題も起こり得ることが指摘されている (Risjord, 2009, p.687)。Risjord (2009) は、心理学や天気予報、経済学、一般的な文脈それぞれにおいて独立して使用される「depression」という概念は、科学的な文脈と一般的な文脈では使用や変化が異なり、変化も同時には起こらず、それぞれの文脈が異なる「depression」という概念を支えていると述べている (p.687)。それゆえ、Risjordはデータ収集において「日常会話と科学的な資料を見境なく混同することは誤りである」(p.687) と批判し、特定の文脈に注意を払う必要性を強調している。

以上のことから、Rodgersのアプローチ方法は、Walker & Avantのアプローチとの類似点も多く、本質主義を理由にWalker & Avantを退けるに足る根拠を内在しているとは言い難い。しかし、どちらのアプローチを選択するかは、概念に関する哲学的基盤や概念にどのように接近するかについての哲学的基盤と研究者が意図する概念分析の目的との親和性によって決定されると考えられた。

VI. 結論

Walker & AvantとRodgersのアプローチを哲学的基盤に注目して比較・検討した結果、Rodgersのアプローチを選択する根拠として次の事柄が示された。

Rodgersのアプローチを選択する場合は、概念分析の目的やアプローチの選択理由が、概念はダイナミックに変化するものであり、境界が曖昧で、文脈依存のものであるという概念に関する哲学的基盤に一致しており、概念の辞書的定義ではなく、文脈や経時的変化から概念を理解しようとするアプローチに関する哲学的基盤との間に一貫性があることが求められる。また、Rodgersのアプローチを採用する場合は、概念の社会的文化的側面や学問間の比較、経時的変化を文脈を損なわないかたちで探究することによって、概念の理解を高め、看護学や看護実践への示唆を得ることが概念分析の目的として挙げられ、結果へと反映される必要があるだろう。

本稿は第68回JRC-NQR (Japanese Red Cross-Nursing Qualitative Research) での発表に加筆修正を行い作成した。

文献

- Cronin, P., Ryan, F., & Coughlan, M. (2010). Concept analysis in healthcare research. *International Journal of Therapy and Rehabilitation*, 17 (2), 62-68.
- Cutcliffe, R. J., & McKenna, P. H. (2005) / 山田智恵里監訳 (2008). *看護の重要コンセプト20 看護の分野における概念分析の試み*. 東京: エルゼビア・ジャパン.
- Denzin, N. K., & Lincon, Y. (2000) / 平山満義監訳 (2006). *質的研究ハンドブック 1 巻 (質的研究とパラダイムの展望)*. 京都: 北大路書房.
- Duncan, C., Cloutier, J. D., & Bailey, P. H. (2007). Concept analysis: the importance of differentiating the ontological focus. *Journal of Advanced Nursing*, 58 (3), 293-300.
- Grove, S. K., Burns, S. K., & Gray, J. R. (2013) / 黒田裕子, 中木高夫, 逸見功監訳 (2015). *バーンズ&グローブ看護研究入門原著第7版-評価・統合・エビデンスの生成*. 東京: エルゼビア・ジャパン.
- Hasse, J., Leidy, N. K., Coward, D., Britt, T., & Penn, P. (2000). Simultaneous concept analysis: A Strategy for Developing Multiple Interrelated Concepts. In B. L. Rodgers & K. A. Knafl (Eds.), *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications*. 2nd ed. (pp.209-229). Philadelphia, PA: W. B. Saunders.
- Hupcey, J. A., Morse, J. M., Lenz, E., & Tason, M. C. (1996). Willsonian methods of concept analysis: A critique. *Scholarly Inquiry of Nursing Practice*, 10, 185-210.
- Hupcey, J. E., & Penrod, J. (2005). Concept analysis: examining the state of the science. *Research and Theory for Nursing Practice: An International Journal*, 19 (2), 197-208.
- JRC-NQR (2012, 12月). 概念分析について. 第49回 Japanese Red Cross-nursing Qualitative Research, 東京. <http://plaza.umin.ac.jp/~jrcnqr/hokoku.html>
- 北素子・谷津裕子 (2009). *質的研究の実践と評価のためのサブストラクション*. 東京: 医学書院.
- Knafl, K. A., & Deatrck, J. A. (2000). Knowledge synthesis and concept development in nursing. In B. L. Rodgers & K. A. Knafl (Eds.), *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications*. 2nd ed. (pp.39-54) 209-229). Philadelphia, PA: W. B. Saunders.
- 中木高夫・谷津裕子・神谷桂 (2007). 看護学研究論文における「体験」「経験」「生活」の概念分析. *日本赤十字看護大学紀要*, 21, 42-54.

- Risjord, M. (2009). Rethinking concept analysis. *Journal of Advanced Nursing*, 65 (3), 684-691.
- Rodgers, B. L. (1989). Exploring Health policy as a Concept. *Western Journal of Nursing Research*, 11 (6), 694-702.
- Rodgers, B. L., & Cowles, K.V. (1993). The qualitative research audit trail: A complex collection of documentation. *Research in Nursing and Health*, 16 (3), 219-226.
- Rodgers, B. L. (2000). Philosophical foundations of concept development. In B. L. Rodgers & K. A. Knaf (Eds.), *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications*. 2nd ed. (pp.7-37). Philadelphia, PA: W. B. Saunders.
- Rodgers, B.L. (2000). Concept analysis: an evolutionary view, In B. L. Rodgers & K. A. Knaf (Eds.), *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications*. 2nd ed. (pp.77-102). Philadelphia, PA: W. B. Saunders.
- 田代順子・氏原千寿子・富安真理・安ヶ平伸枝 (2002). 経験を概念化する方法を使って看護現象に迫ろう！. *Nursing Today*, 17 (5), 52-55.
- 上村朋子・本田多美枝 (2006). 「概念分析」の主な手法とその背景についての文献的考察. *日本赤十字看護学会誌*, 6 (1), 94-102.
- Walker, L. O., & Avant, K.C. (2005) / 中木高夫, 川崎修一訳 (2008). *看護における理論構築の方法*. 東京：医学書院.
- Weaver, K., & Mitcham, C. (2008). Nursing concept analysis in North America: state of the art. *Nursing Philosophy*, 9, 180-194.
- Wuest, J. (1994). A feminist approach to concept analysis. *Western Journal of Nursing Research*, 16 (5), 577-586.
- 八木沢敬 (1998). 本質主義. 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一他編, *岩波哲学・思想事典所収* (p.1509). 東京：岩波書店.